

常だったら、いくらおじ姓のあいだからでも、こんな乱暴が許されるはずもないのですが、いまは、私が、無理にでっちあげた理由があるのですから、もうすっかり私のなすがままで、かろうじて、許しを求めるばかりです。

こうなると、罰をうける者の心理は、おかしなもので、いかにも自分が大きなあやまちを犯したような、そんな錯覚におそわれてしまうのです。そして、そうされているうちに、なんだか子供っぽい、おとなをおそれる心がよみがえってきたと見えて、

「ああん、ああん」と、ベソをかくような声をあげます。

そんな万知子の子供っぽい様子が、いよいよ私の気持ちをたきつけました。

もう、自制するゆとりがありませんでした。

「万知子ッ」

私は、不意に、割れ返るような大声を出すと、あらあらしく、彼女のストラックスをはぎとり、とうとうハダカの尻を露出させてしまったのです。

万知子は、奇妙なさげびごえをあげ、それにつられて、私も何か、ワケのわからないことをわめいていました。

ふたりとも、なにかしら、狂ったような気分のなかで、激しくもつれ合い、その中で、

「こいつ、こいつッ……」

という私ののしり声と、激しく尻の肉の鳴る音が、ひびきつづけたのです。

こうなるとは、もう万知子も、事態が、たんなるお仕置き以上のもの

好きな人に贈る!! (未成年の方)  
おこたわり

大人の珍本 送共千四百円

大人の写真 送共 五百円

書画目録千30円封入の方に送る

東京都新宿局64号イ 愛好堂

に、わずかに顔をゆがめて、

「ウッ」

と、声をあげるのです。

しかしその顔には、ふしぎな陶醉の表情さえ浮かんでいるのを、私は見たのです。

そして、打つ者と、打たれる者のあいだには、一種の、なれあいめいた、暗黙の了解のようなものが、いつのまにか、うまれていたのです。

万知子が約束を破った。

だから、おれは万知子をブツ。

あたしは、約束を破った。

だから、おじさんにブクられる。

そんな口実があるのをよいことに、ふたりは、いまや、妖しい肉のよろこびに酔いしれていたのです。これが、私と万知子の秘密の交感のはじまりでした。

〈告白〉

母

の

手

内藤道子

幼い日、母にぶたれた感触が、いまでも、あたしのお尻にマザマザと残り、その官能ゆえに、絶好の恋人を得たのです!

みにくく冷酷な

母が死んだのは、わたしが十歳のときでした。ですから、わたしには、あまり母の記憶はありません。

わたしはひとりっ子でしたが、母は、だからといって、あまやかせず、母の死を知らされても、人前で涙一滴見せない子供にわたしを育てた、というしつかり者で、それは、しつけのきびしい、かしい母親だったと、近所の人から、あとになって聞いたことがあります。

そのことについては、わたしにもうなずけるところがありました。

わたしの母についてのわずかな記憶のなかで、一つだけ、いまでもなまなましく、鮮明

